

会員向け勉強会に参加して

難波特別支援学校支部 永井 昌明

7月17日の勉強会は社会福祉法人北摂杉の子会 常務理事 松上利男様を講師にお招きして、「合理的配慮に基づいた支援について」～自閉症の特性理解と支援を通して～がテーマでした。



最初に京都府での「障害者・児施設等の身体拘束に係わる実態調査」から、身体拘束を行った例のある対象施設のうち、知的障がい者施設(85%)、障がい児施設(88.9%)の調査結果が出ている。

また、この調査から身体拘束の廃止が困難な理由として、「結果として有効な方策がなく、廃止できない事例が残る」(71%)、「介護を担当する職員が少ない」(24.6%)とあり、身体拘束される利用者の多くは重度知的障がい者で強度行動障がいを併せ持つ人たちであった。また、T施設における利用者に対する虐待が発覚した等のお話でした。

そして、障害者虐待防止法が施行されて、まもなく2年経ちますが、全国での「障害者虐待対応状況調査」から被虐待者の中に行動障がいがある者が<養護者による障害者虐待>において26%含まれ、<障害者福祉施設従事者等による障害者虐待>において22.7%含まれていた。この中に自閉症児・者に対して適切な支援がなされず行動障がいを引き起こしている事例があるとのことでした。

例えば、足の不自由な障がいを持つ人へは車椅子やバリアフリーな構造が必要なように、障がいある人たちへは障がい特性に応じた、人も含めた環境の提供が必要であり、特に見えない障がいと言われる自閉症の人たちへの理解と対応(合理的配慮)がとても大切だと言われました。

次に、「自閉症(自閉症スペクトラム)とは」どんな障がいか?親の育て方や環境が原因ではなく、生まれつき脳の働きに偏りがあり、情報処理の仕方が一般の人とは物事の見え方や理解の仕方が違う。

対人関係(社会性)・コミュニケーション・想像力の3領域に障がいを持つ典型的な自閉症の人から、軽度な人まで連続して存在している。知的レベルについても、知的発達に遅れのある知的障がいを伴う人から、知的発達に遅れがない人等さまざままで、発達の偏り、対人関係(社会性)、コミュニケーション、想像力、その他の行動特徴、心の理論、中枢性統合の弱さ、実行機能、注意の問題等について分かりやすく解説されました。

まず、自閉症の本人を理解すること(アセスメント)が大切で、それには、芽生えスキル、強み・長所・得意なこと。⇒強みを生かす、苦手なこと、興味・関心、理解の度合い、表現(受容性コミュニケーション)、表現(表現性コミュニケーション)等について理解することです。そして、自閉症の人たちへの支援のポイントは強みを生かした支援、視覚的、具体的、肯定的、失望させない等。⇒成功体験、プライドを育てる支援が基本です。

支援のポイントとして、次の項目をあげておられました。

- 言葉の理解が難しい。
⇒言葉以外の伝え方を活用する。
- 抽象的な事や、曖昧な事を理解するのが難しい。
⇒具体的に伝える、明確に伝える。
- 周りの世界が何を意味しているのかが分かりにくい。
⇒環境を分かりやすくする。
- 見通しが持ち難い、変化に対する混乱。
⇒時間の見通しを分かりやすくする。
- 自分からのコミュニケーションが難しい。
⇒本人からのコミュニケーションを育てる。
- 感覚刺激に対して特異な反応をする。
⇒感覚刺激をコントロールする。
- 動機付けが難しい。
⇒特技、興味、ごほうび、好きなことを教材にして広げていく。
- 自立して行動することが難しい。
⇒小さい頃から、少しずつ自立して行動することを意識して伸ばしていく。

現在、実践されている支援の実例写真を見ながらその解説をされ終了時間となりました。

松上様の今日まで歩いて来られた福祉の現場での多くの実践や経験を織り交ぜてのお話は説得力があり、ドラマチックな出会いなどエピソードも紹介され、もっとお話をお聞きしたい感じでした。